
悪魔と剣士と

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と剣士と

【Nコード】

N4818P

【作者名】

kuroyumi

【あらすじ】

悪魔と姫と剣士の物語

ハンターと姫

何とも言えない叫び声を上げて悪魔が飛び掛ってきた。

少年は目の前にいる悪魔を切り捨てると、すぐさま振り返り飛び掛ってきた悪魔を斬る。

きりがないな。

大量の悪魔の屍が少年を取り囲む壁のようになっている。

ただ、その壁はかなり嫌な匂いを放っているのだが……。

ちらり、と自分の右腕を見してみる。

悪魔のどす黒くて（しかも、くさい）血がこびりついているせいで視覚的には分からないが、さきほど斬られた箇所からの出血がひどい。

片手で剣を扱うのももう限界だ。

”出口”を探さなくては……。それも早急に。

すでに新手の悪魔たちがぞろぞろとこちらに向かってきている。血の匂いを嗅ぎつけたのだろう。

顔は人なのに身体が狼という奇妙な組み合わせの悪魔だ。

30匹はいる。

少年は意を決して走り出した。

その姿に気づいた悪魔たちも一斉にこちらに向かってきた。

走る、走る・・・。
命がけの追いかけてここが始まった。

最悪の出会い

最悪・・・・・・・・。

上品なドレス、何十人もの召使い、そして何より純血のパスト人の家系のモノ同士の婚姻によって保たれているその黄金色の流れるような髪。

（一般人たちはさまざまな国の民との交わりによって

パスト人特有の金色の髪をうしないつつある）

たった今、最悪・・・・と心の中で呟いたのは神聖パルト王国の姫シーデイスだった。

何の苦労も無く育った彼女がなぜこんな発言をしたのか。

そのことはこの神聖パスト王国の現状と大きく関わっていた。

神聖パスト王国はかつては大陸の3分の2を支配するほどの大国であつた。

だが、その支配からの脱退を目的して蜂起した反乱軍が

神聖パスト王国が支配していなかった大陸の残りの国ぐにと連合軍を結成。

シングル連合国となつた。

シングル連合国を神聖パスト王国が国として認めなかったことから今回の戦争が勃発した。

始めは神聖パスト王国が優勢であつた。

しかし、序じよに勢力を盛り返したシングル連合国は

最近、神聖パスト王国の領地をじわじわと奪い、追い詰めていった。

このままでは負ける。

この最悪の結果を回避するために神聖パスト王国がとった手段は政略結婚だった。

大陸一の美人と呼ばれるシーデイスをシグル連合国の盟主と結婚させ矛を収めさせようというのだ。

もちろんこの政略結婚によって全てが丸く収まるはずがない。

神聖パスト王国は再び勢力を回復するための時間稼ぎがしたいだけでシグル連合国といえは性急に”こと”を急ぎすぎたせいで不満の溜っている民をなだめたい、というのが本音だ。

こうして双方の利害がいつちし、”めでたく”結婚成立、といわけだ。

最悪……。

シーデイスは再び呟いた。

いつそこから身を投げましようか？

顔を見たことも無い男（しかも敵）の”モノ”になってしまいうらいなら。

眼下に広がる青く、そして底が知れないほど深い海を見下ろす。

身を乗り出したその時、背後でガラスを引つかくような音が響いた。猫のような速さで振り返るとそこには不思議な光景が広がっていた。

部屋の空中に白く、細い線が走る。

なに、これ？

思わず後ずさる。ついさっきまで死のうかと考えていたことなどころつと頭から転がり落ちた。
さらに、恐怖は続く。

空中の白い線から手が飛び出したのだ。

きゃあああああああああああああ！！！！！

出てきたのは普通の手（空中からでてくる時点で”普通”ではないが）

ではなく血まみれだったのだ。

まるでお話に出てくるゾンビの手のようだ。

手はまるでカーテンを開くかのように白い線を大きく広げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

悲鳴すらのどから出尽くしたというのにまだ続くの？

白い線は人が通れるほどの大きさの円に広げられ

その円から少年がシーデイスの部屋に転がり込んできた。

少年は全身血まみれで、左手にはシーデイスの身長ほどもある剣を握っている。

はいつくばったまま少年は肩で息をし、円に手を伸ばした。

円の縁をつかむと今度はそれを閉じ始めた。

は？何こいつ？

え？これって・・・え？

シーデイスの頭の中には分けの分からない問いがぐるぐるぐる回っている。脳みそがかきまわされる。

あともうちよつとで円が閉じられる、というその時
円の向こう側から何かがその身体をぐいっとねじりこんだ。

人・・・いやあ！！身体が狼になつてる！！！！

「畜生！！入ってくんなよ！！」

恐怖に駆られへたりこんだシーデイスとは対照的に少年は悪態をつきながら立ち上がり、円を無理やりとじようとする。

「くそつたれ！！」

半人半獣の化け物に手を噛まれ、少年が手を庇った瞬間
そいつは部屋に入り込んできた。

少年はさらに悪態をつき（化け物の姿は見るに耐えないが
この少年の悪態は聞くに堪えない）

円をぴしゃ！！と閉じ、剣を左手でつかむ。

化け物は人の顔で狼のうなり声をあげ、少年と対峙する。

「一体だけで俺に勝とうなんざ無理なんだよ！！」

化け物は歯をむき出しにして飛び掛る。

少年は避けようとはせず、剣で化け物の身体を鼻先から真っ二つに斬った。

大量の血が噴水のように辺りに飛び散る。

「ざまあ・・・・・・・・み・・・・ろ・・・・・・・・・・。」

少年は玩具の取り合いに勝った子どものような笑みを浮かべそのままその場にぶっ倒れた。

部屋にはシーデイスのうめき声だけが漂った。

ハンター ジェス

さて、ここでクイズです。

部屋の中は血まみれの少年と真つ二つにされた狼のような化け物。

部屋の壁には血が模様のようにこびりついている。

まあ！！なんて素敵な模様でしょう！！

おっと話がずれちゃった。

この状況をどう解決したらいいでしょう？

・・・・・・え？分かんない？

じゃあ私の今の状況と同じね。

あなたより私はもっと混乱してるけど。

神聖パスト王国の姫、シーデイスは部屋の隅でうずくまった動けなかった。

とりあえず、侍女を呼ばなくちゃ・・・・・・。

ゆっくり立ち上がり、ドアに向かった。

化け物と少年を避け、大きく迂回してドアにたどり着いた。
その時、けたたましいノックの音がした。

「姫様！！シーデイス様！！いかがなさいました！？

シーデイス様！！」

よかったティンだわ。

ティンは元々は幼いころのシーデイスの遊び相手として王宮にあがった少女だ。

パスト人とどこかの民族との混血によって金髪ではなく

やや茶色がかった色の髪、ぱっちりとした大きな目。

そして物おじしないティンとややはやけたシーデイスはやけに気が合い

シーデイスは彼女と別れなければならなくなったとき大泣きして周囲を困らせた。

しかし、別れから5年後、彼女は思いがけない方法で戻ってきた。

シーデイスの側に仕えてその身を守る護衛を募集した際、数多の兵士たちを

けちらしてその座についたのがティンだった。

5年前より身体の凹凸がはつきりした（これにはびっくり！成長期ってやつ？）

彼女いわく。

「私は元々武家の人間なんです。

本当は剣士になる必要は無かったんですけど

シーデイス様の側にいられるって分かったらやらないわけが無いでしょう？」

かるゝゝく言い放ったがその剣腕を手になれるためにどれほど苦労したことだろう？

そこまでしてくれたティンにはシーデイスは頭が上がらない。

とにかく彼女はシーデイスが最も信らいをおいている人物なのだ。

そしてそのティンが来てくれた。

「開けますよ!!」

ドアが強制的にけ破られた。そういえばかぎを掛けていたんだっただわ。

ぬき身の細身の剣を持ったティンが部屋に駆け込み、中の様子を見て大きく目を見開いた。

部屋中に血が飛び散り、剣を握った少年が血まみれで倒れている。驚いているティンにシーデイスが抱き付く。

「これは……一体どういう……?」

「ああ、ティン!!」

私がいきなり部屋に現れた男を殴り倒して
部屋中にケチャップをまき散らしたっていうの!?

「落ち着いて下さい。言ってることめちゃくちゃです。」

シーデイスをなだめて落ち着かせ倒れている少年から離れたところに座らせ

ティン自身は剣を持ったままゆっくりと少年に歩み寄る。

本当に血まみれだ。この少年から流れているのかそれとも
返り血か……。いずれにせよ尋常ではない。

ティンは少年の剣に視線を落とした。

血がこびりつき、あちこち刃こぼれしてはいるが元は名のある剣だったのだろつ。

今はその面影は遙かかなたに逃げてしまっているが……。

剣を取り上げようと手を伸ばした。

その時、少年の手がぴくつとわずかに動き、倒れたままの姿勢で剣を振るった。

首に向かってくる剣を寸前の所で押し留める。

だめだ。両手で剣を持っても少年の片手剣に力負けしてしる。

無言の押し合いは、少年が顔を上げた瞬間に終わった。

少年はティンの顔を見てはっと目を見開いた。

「人間……。」

ティンは少年の力が弱まるのをはつきり感じた。

少年の左手を踏みつけ剣を手放させ、その首に剣を当てる。

「卑しくもここは神聖パスト王国の姫、シーデイス様のお部屋。貴様、どうやってここに侵入した？」

苦悶の表情を浮かべ、少年はティンに食って掛かった。

さっきまでぶっ倒れていたとはとても思えない。

「シーデイス様？」

ああ、俺が”出口”から入って来た時、魔獣サキユロスみたいな悲鳴をあげたやつか。

あの悲鳴のせいで俺の鼓膜が少なからず被害を受けたんだぞ！！
どうしてくれるってんだ！！え！？」

シーデイスは啞然として口を開けた。
魔獣サキュロス？私が魔獣？

ティンは怒りで顔を真っ赤にして、ますます剣を握る手に力を入れた。

「黙れ！！」

「それにパスト王国では怪我人の首に剣を当てるのが礼儀なのか？それとも今、怪我人に剣を突きつけるのが流行ってるのか？

そのうち相手を斬るのが流行るかもな。

「……そんな流行はごめんこうむるけど。」

「つつ……！！この……！！」

「止めて、ティン！！」

シーデイスが止めに入らなかったらほんとに殺していたかもしれない。

ティンを少年から引き離し、少年をにらみつける。

「あなたもあなたよ！いきなり出てきてなによ、その態度！！」

少年は仰向けになるとふうと息を吐いた。

「この態度は……誤ろう。すまん。

だが、ここに出てきたのはまったくの偶然だ。

”出口”ってのはどこにつながってるかまったく予想がつかないからな。

この前は肥溜めの上につながっていて……あれはくさかつ

たな。」

「”出口”？」

「そもそも貴様は何者だ？」

シーデイスとティンの問いが重なった。
少年が眉をひそめる。

「おいおい、俺の口は1つしかないんだぞ。
質問は1つにしてくれ。」

「順々に答えればいい話だろう？」

ティンが鋭く言い放った。

「それもそうだな。」

「なかなか冴えてるじゃないか。」

ティンを馬鹿にしているのかもしれない。
だが、質問には正確に答え始めた。

「まず”出口”のことだが、これは悪魔の世界とこの人間世界をつ
なぐ通り道だ。」

さっきもいったがこれはどこにつながっているかが分からない。
だから肥溜めの上に落ちたりすることもある。

そうそう、肥溜めに落ちたときの話なんだが………」

「そんな話はいい！！さっさと話を続けろ！！」

「そうか・・・まあ、あんまり綺麗な話じゃないからな。
次に俺が何者かってことだが、これは一言で事足りる。
俺はハンター。ハンター、ジェスだ。」

訳が分からない。答えが答えになっていない。

シーデイスは横にいるティンに助けを求めるように見やると
彼女の顔からはすでに怒りが消え、代わりに驚きが浮かんでいた。

「ハンター・・・・・・・・。」

「ってなに？ティン。」

自分が知らないことを人が知っていて、しかも一人で納得している
時ほど

じれったくいらすることは無い。

「なあ・・・こうして血まみれで横になってるのはほんとに
気分が悪いんだ。風呂、貸してくれないか？ついでに服も。」

「ねえ、ティン。ハンターってなに？」

見知らぬ少年に風呂を貸すのはためらわれたが
ティンからゆっくり話を聞くためには少年に出て行ってもらうのが
よかった。

ティンは血のついた絨毯やカーテンをてきぱきと片付け

壁についた血をふき取りながらシーデイスの問いに答えた。

「ハンターは称号です。」

何をしているのか分かりませんがその手は常に血塗られ
身体からは腐臭が漂っているとか……。

噂だと思っていましたがまさか本当だとは思いませんでした。」

しかも口が悪い……と付け加えた。

「悪かったな、口が悪くて。」

綺麗な言葉ばかり使つてると口がぬるぬるして気持ちが悪くなるんだよ。」

まさに鴉の行水。お湯の中にゆっくりつかろうなどという気持ちは
ジエスにはまったくなかったらしい。

侍従の服を着たジエスは見動きにくそうにしている。

意外にも似合っているが、手に持った大剣がどうも不釣り合いだ。

「おかげでさっぱりしたありがとな。」

あら？よく見たらなかなかいい顔立ちじゃない、この子。

髪はさっぱりとした黒の短髪で、目も石炭のように真っ黒だ。

「色々聞きたいことはあるけど、私もお風呂に入ってくるのは。
ティン、私が出るまで見張っていてくれる？」

「はい。」

「人を鎖に繋がれてない犬みたいにいうなよ。」

ジェスの言葉は無視して浴槽に向かう。

服を脱ぎながら色々考えた。

悪魔の世界、”出口”、悪魔、そしてジェスのこと……。でも、あの子ちよつとなぞめいてて不思議な雰囲気があるのよね。ちよつと気になるわね……。

浴槽に足を踏み入れた瞬間、それらは湯気のように消え去った。

きや ああああああああああああああ！！
なに、これ――――！！！！

緑石という石で敷き詰められた浴室はいまや真っ赤になりさらに浴槽は血の海のような有様になっている。

ジェスは浴槽にすっかり入っていたのだ。

しかも湯船に入る前に血を落とそうなどまったく考えずに。

ハンターの警告

血まみれ浴槽事件の後、口の聞けなくなったシーデイスに代わってティンがジェスに制裁（一発本気でぶん殴った）を加えて話が再開した。

「私もハンターのことについては人づてにしか聞いたことがない。何か言いたいことがあれば聞くが、何かあるか？」

殴られた頬を撫でながらジェスはいくぶん不機嫌そうに答えた。
本人にとっては悪気は無かったのだろうが、あまりにあれは・・・

「まずお前達は根本的にハンターのことを誤解している。
悪魔を狩る者、それがハンターだ!!」

ジェスは立ち上がり熱っぽく語りだした。

「俺たちハンターは悪魔のみを狩る。決して人間に手を出したりはしない。

それが俺たちの誇りだ!!

世の中には俺たちのことを殺人者だの悪魔の手下だのいうヤツがいるが

俺たちのおかげでこの人間世界の平和が保たれてると言っても過言じゃない!!」

ジェスは身振り手振りを交えてますます熱くなっていく。

「いいか？人間世界のすぐ側に、もちろん距離的ではなく

空間的な話だが、そこに悪魔たちの住む世界がある。」

シーデイスは半人半獣の化け物を思い出して身震いした。
あんなヤツらが住む世界がすぐ側にあるの。

「ヤツらは常に飢えていて凶暴で、だが大抵は知能もなく、馬鹿だ
っかりだ。

ヤツらがもし学生だったらどんな教師だってさじをなげちまうよ！
まあ、また間違えたの！？どうして5年も教えてるのに1+1も
分らないの！？

先生もうやんなっちゃうわ！！……ってな具合にな。」

「どうでもいいが……。」

ティンがいらいらと足を踏み鳴らす。

「その類のくだらない話を抜きにして話せないのか？」

ジェスがティンをにらみつけた。

「俺は少しでもわかり易くなるようにと思ってやってんだ！
まあ、いい。

とにかく悪魔たちが人間世界に踏み入れることは無かった。
ところが最近それが変わりはじめた。

悪魔たちが自分たちの世界から人間世界に入り込んでくるようにな
ったんだ！」

「ちょっと待って。

さっき悪魔は馬鹿ばかりって言ったわよね？

私が先生に習った限りでは世界から世界、空間から空間を移動す

るには

かなり高度な魔法を使わなければならないのよ。」

シーデイスが指摘した。

ジエスは最もだというふうに頷いた。

「悪魔の中にも魔法を使うやつはいるが空間移動を使えるほどのやつはいない。

……通り道が勝手に出来てるんだ。」

「あなたはその通り道を作っていたじゃない!!」

「あれはハンター特有の能力だ。

俺たちは望めばいつでも、加えてどこからでも悪魔世界に行く力を持っている。

ただ、一度入ると簡単には出て来れない。

人間世界に戻るには”出口”と俺たちハンターが呼んでいる空間のほころびを

見つけて、あとは入るのと同じ要領で通り道を作ればいい。」

「悪魔たちはあんたたちの後を通ってこの世界に入ってきてるんじゃないの?」

若干の皮肉を込めてシーデイスが言い放った。

ジエスのあとを追って悪魔が入ってきたことはまだ忘れられない。

「あれは……ミスだ……単純な……。

普通はあんなことはないんだ。

ただ、あんまり疲れていたから……つい……”出口”の側に悪魔が

いるのに気づかなかったんだ。」

視線を落とし、もごもごとジェスは言った。

その様子を見てシーディスとティンは顔を見合わせ吹き出した。

「あはははは、なんだ意外に面白い所あるじゃないの。」

「とにかく!!!」

2人の笑い声をかき消すようにジェスは叫び、再び威勢を盛り返した。

「悪魔たちはどうやってかできた通り道を通って人間世界に入り込んできている。」

通り道が開いている時間はまだ短く、できるのも散発的だ。

通り道が開いても、それに悪魔が気づかないこともある。

だが、このまま放って置く訳には行かない。

だから俺たちハンターが悪魔世界に乗り込み、そこで悪魔たちを殺して

人間世界への侵入を防いでいるってわけだ。」

「しかしそれなら腕のいい戦士を集めて一緒に悪魔世界に行けばいい話だろう？」

なぜ、ハンターのみで戦う？1人より集団のほうがいいはずだ。

それとも通り道はハンターしか通れないのか？」

ティンがいかにも戦士らしい考えを述べた。

ジェスが首を横に振った。何も分かっていない、そういうふうに。

「いや、一度開けば誰でも通れる。」

だが……お前はあの世界に行ったことがないからそんなことが言える。

一面見渡す限り血の染み付いた大地が広がり、立ち枯れた木々空には常に厚い雲が立ち込めて、日が一切差さない。血を絞ってるんじゃないかと思うほどどす黒い川が流れる。」

ジェスの目にが序序に曇っていく、悪魔世界を思い出しているのだろうか。

「それにあの空気、いるだけで息がつまる。

そして腐臭、ハンターのそれが悪魔のそれが分からない肉から放たれる。

内臓、骨……ありとあらゆる不快な物が転がっている。

何よりも24時間悪魔の襲撃に気を張らなくてはならず、そして襲ってくる悪魔。

終わりが無い……あの数。

どんなやつでもあんな場所に長くいたら気が狂う。

いや、ハンターだけは別だな。」

ジェスは意味深な言葉で話を締めくくった。部屋に重苦しい雰囲気の流れた。

「ところで……一ヶ月も悪魔世界にいたから今人間世界がどうなってるのか

まったく分からないんだ。教えてくれないか？」

ほかに話すことも無い。シーデイスはゆっくり話し始めた。

ジェスは話をさえぎることもなく最後まで聞いた。

シーデイスが政略結婚させられる、ということを知っても何も反応

しなかった。

「悪魔世界に行く前よりひどくなってるのか。

……しかもまだまだひどくなるな、絶対。

ああ、それとあんた……シーデイスさん？

あんた……死ぬよ。」

「……それってどういうこと……？」

シーデイスは思わず声が上ずった。ティンはジェスをにらむ。

殺気のこもった目つきだ。

「おいおい、俺をにらんだからって状況は何にも変わらないぜ。

考えてもみるよ、あんたは人質だ。

パスト王国が攻め込んで、殺される。

パスト王国が攻め滅ぼされても王族の血を引くあんたは殺される。

「

正論だ。正論だけにシーデイスの心に深く傷をつけた。

「まっ、向こうの盟主によっぽど気に入られたら助かるかもしれないけど

あんたは……そんなふうに媚を売るのはできそうもないからな。」

媚を売る、確かにできそうもない。

「それ以上その口を開くな……！」

ティンが剣を抜き、ジェスの首に突きつけた。

「あんた短気だな。損するぜ、せつかく美人なのに。短気は損気ってね。」

もちよつとカルシウムを取ることをお勧めする。
牛乳とかいりことか・・・ああ、ほうれんそうもいいらしいぞ。
ん？あれは鉄分だったかな。」

ティンが目をすうと細めた。手に青い血管が浮く。

「それと・・・・・・・・」

ジェスの口調が一変する。

この感じは、悪魔と対峙していた時と同じだ。

「調子に乗るなよ。」

ジェスは獲物を捕らえる蛇のごときすばやさでティンの手首をつかみ
力いっぱい背負い投げをして彼女を地面にたたき付け、剣を握って
いた
右手を踏みつけて剣を手放させた。

「お返しだ、踏まれたのは左手だったかな。」

「うう・・・・・・・・」

あのティンが、大の男の兵士でさえ軽くあしらう彼女が
いとも簡単に制圧されてしまった。

「俺は真実を述べただけの話だ。」

シーデイスさん、あんたも覚悟を決めるこつたな。

それとも……」

ジェスは空中に線を引くような動作をした。

例の白い線が現われ、ジェスがそれをつかみ広げた。
あっという間に通り道ができた。

「悪魔世界に来て、この場から逃げるか？」

振り返ったその顔に浮かぶ笑顔と歯を抜き出しにしていた悪魔の顔
が重なる。

ジェスは自分の大剣を拾い上げた。

「あんたは悪魔よ。」

シーデイスがうめいた。

ジェスはちよつと首をかしげた。

「かもな。」

こうしてハンター、ジェスは去った。

シーデイスが目を背けていた現実を突きつけて。

孤等のハンター

駆ける、駆ける。

ハンターのジエスはひたすら駆けた。

イモムシの身体をした悪魔がそのあとをのそのそと追ってくる。

さきほど剣でまつぶたつにしたところその身体から吹き出した妙な液体が

ジエスの身体に降りかかった。

返り血を浴びるのはいつものことなので気にしない。

ところが液体を浴びた箇所がじゅうじゅうと音を立てて溶けはじめたのだ

せっかく手にいれた新しい服に早くも穴が開いたのだ。

まあ、この悪魔世界で綺麗なままにいるなんて雨をかわして移動すんのも同じくらい不可能だ。

飛び道具などはもってないのでこうして逃げるしかない、というわけ。

もう何日も後を着けてきている。

撒いた……そう思っても1日後（この世界では時間の感覚が分からなくなる

翌朝、とか一時間後とかいう感覚が通用しなくなるのだ。

そのため推測で、もう何日などと言っている。

一応、一日経ったなと思ったなら服に傷をつけて日数を数えている（

にはなぜかまた後をついて来ている。

同じやつなのか、それとも別の同じ種の悪魔なのか……よく分からない。

「あゝもうしつこい!!」

それでも喰らえ、悪魔ども!!」

足元の血の染み付いた土くれを投げつける。

さすがにこんなものでは死なないが、気晴らしにはな……らなかつた。

イモムシ悪魔どもの後ろから何か来る。

いやに足が長く、その割に手は短い。

丸い玉にそれらがひつついているというかなり不恰好な悪魔だ。

はつとあたりを見回すと、足長悪魔が四方八方から走ってくる。

逃げ場はない。

足長悪魔が走りこんできた。そして丸い（これは胴体……なのか？）

部分から小さな穴が開き、そこから液体を吹きかけた。

イモムシと同じやつか!!

さつと横に転がって液体を避け、転がりざまに足長悪魔の足を剣で斬った。

続けてその隣の悪魔の足を斬る。

丸い胴体と思われる箇所はあえて斬らない。

斬ったらイモムシと同じように例の液体が噴き出す可能性があるからだ。

空中を舞う、酸の液体。

それをかわしながら、足長悪魔の足を斬りおとしていく。

死のダンスは続く。

俺の動きに対する拍手喝采はいくらでもかまわないがその代わりに酸の液体を吹きかけるってのはひどいな。ま、これがヤツらの乏しい精一杯の拍手なんだろうよ。

やがてあたりには醜い玉がころころとうらめしそうに転がった。

「やっと終わった。」

はあ、はあ、と肩で息をしているとイモムシ悪魔がすぐ側に迫っているのが分かった。くそ、また走るのか。

1匹がぶるつと震え、風船のように膨らみはじめた。

まさか……。

そのまさかだった。

パアッンと破裂し肉片と酸液が飛び散る。

なんとかかわしたがあたりはすでにイモムシ悪魔どもに囲まれてい

る。

飛び越えるか？いや、空中ではあの酸液をかわせない。
かと言ってこのままここにいたら・・・・・・・・・・。

もぞもぞ

やっぱり酸を覚悟で飛び越えるしかない。

もぞもぞもぞ

いくぞ！！

ひざを曲げ跳躍しようとした時、思いがけないことが起こった。

ジェスのまわりを囲むイモムシ悪魔の下から赤い光が輝き

その光の上をはずりまわっているイモムシ悪魔が

どんどんとやせ細っていくのだ。いや、正確には生気を抜かれていくような感じがした。

やがてイモムシ悪魔どもは枯れ木の枝のようになってしまった。

「くく、なかなかいい眺めだ。そう思うだろう？若いハンターよ。」

悠々と一人のハンターが歩いてきた。

足元のイモムシ悪魔などもはや眼中にないようだ。

血が染み付き赤黒く染まった髪、皮膚には血が薄い膜を張って固まっている。

そして赤く、まるで血を流し込んだような目。

熟練のハンターだ。間違いない。

「今のは、一体？」

魔法だろうか？とにかく覚えておけば便利そうだ。

なぜかハンターというのは長く一緒にいることができない。

そのため、珍しい魔法や悪魔の情報を出会った時に相手に伝える。

そしてすぐ別れる。それが通例だった。

弟子と師匠という関係を結び共に行動することもあるが、これは例外だ。

「地中に住まう吸血鬼ブライドの放つ赤き光を浴びた者は全身の血を抜かれ、死ぬ。」

血はブライドにそして生氣は私に……というわけだ。

まあ、この技を使うにはブライドと契約を結ぶ必要がある。

お前では血を抜かれて殺されるだけだ、止めておけ。」

「ブライド……え！まさか、あなたはクレシス……さん？」

異界の精霊”吸血鬼ブライド”。

悪魔とも人間とも異なるこの精霊と契約を結んでいるのはハンターの中のハンター、クレシスのみだ。

クレシスの”伝説”はよく聞いている。

クレシスはもう何年も人間世界に戻っておらず

（悪魔世界で食料となるものはすくない。ゆえにどんなハンターでも数ヶ月に一度は人間世界に戻るのだ。

ちなみに悪魔世界ではハンターは食料をそれほど必要としない

これには理由があるのだが……）

たった一人で何百という悪魔と常に戦っているという。

しかもその悪魔は普通のハンターではとても適わないほど強いらしい。

そしてクレシスは”赤眼”の持ち主でもある。

悪魔の血は有毒だ。浴びるのも良くないが飲むなどもつてのほか。

しかし、その血を長く浴び続けると、序序に身体に悪魔の血が浸透し目が赤く染まってくる。

つまり熟練のハンターである証拠が”赤眼”なのだ。

ただ、”赤眼”になる前にも様々な変化が現われる。

例えば悪魔世界にいる間は食料がほとんどいらなくなる。

人間世界よりも悪魔世界にいるほうが、まるで家にいるようなしくりする

感じがする、などなど。

ようするに、悪魔に近づいていくのだ。

つまり強いハンターであればあるほど悪魔に近い存在になるのだ。

しかし悪魔に近くなることに抵抗があるハンターなどどこにもいない。

悪魔を殺すことがハンターの宿命であり、人生そのものだ。

そのためならなんだってなってる。

クレシスはその場に座り込み、手を振ってまあ、座れというふうな手振りをした。

側に座ると、クレシスは枯れ枝に火をつけた。
ぱちぱちと炎がはぜる。

「まず自己紹介からだな。知っているようだが私はクレシスだ。」

「私はジェスです。」

クレシスが目を細める。

お、もしかしてご存知なのかな？

「知らんな。」

がくつ、まあ、そんなもんだろ。

「ジェス、お前に聞きたいことがある。

ずいぶん身なりがいいようだが、つい最近、人間世界に戻ったな
？」

「あ、はい。」

「様子はどうだ？」

ジェスはシーデイスたちから聞いた話をそのまま伝えた。

それにしてもティンってやつはなかなか骨がありそうだった。

あんな別れ方はちょっと悪かったかな。

クレシスは悩み深そうな表情を浮かべ、黙り込んだ。

「戦乱は拡大し、このままだと強大な勢力がぶつかってしまうのか。
ふむ……………ジェス、自慢ではないが私は長くこの悪魔

世界で

戦ってきた。」

うん、どう聞いても自慢にしか聞こえない。が、黙っておいた。
え？あの2人の時と対応が違うって？

そりゃあ今日の前にいるのは大先輩だからな。

先輩は立てる。これ鉄則。覚えておいて損はないぜ。

「その中で気づいたことがある。

自然に通り道が出来る回数がだんだん増えてきている。」

たまに出会うハンターからの話とこの事実を照らし合わせてみて
私は1つの仮説にいきついた。」

「なんでしょうか？」

猫被った俺。自分で言うのもなんだが・・・似合わね〜。

「通り道出現数は、人間世界の戦乱の拡大と比例している。」

「！！え、じゃ、じゃあもしパスト王国とシングル連合がまた戦争を
始めたりしたら・・・。」

「互いに次に刃を交える時には徹底的に相手を潰そうとするだろう。
人間世界に血の海ができた時、”出口”が大量に出現し悪魔たち
が一斉に

人間世界に入り込む可能性が十分ある。」

「でも・・・あの失礼ですけど、それって可能性ですよ？」

クレシスがジエスと視線を合わせた。

今までどんな恐ろしく、醜い悪魔ににらまれてもなんとも思わなかった

ジェスの背中に冷たい汗が流れた。

蛇ににらまれた蛙・・・ってかアナコンダににらまれたアマガエルって感じた。

「何年か前にこの悪魔世界のいたるところに”出口”が出現した。閉じてても閉じてても、”出口”は現われ、悪魔どもがそこを通ろうとした。

その時はなんとか食い止めたが、後にその時、人間世界にいたハンターに

話を聞くと、丁度その時バストとシグルが戦争をしていたという。また防げばいい、などというな。

その時の戦いで多くのハンターが命を落としたのだからな。」

「では、なんとしても戦争勃発を防がないと。

しかし両国とも今回の結婚はただの時間稼ぎって感じて準備が整ったらまた始めちゃいますよ。」

「・・・連合軍盟主と姫の結婚か。

盟主の方が本気で戦争を止めようとしたら、どうだ？」

確かに盟主の意見ならばむげにはできない。

シグルは連合国だから盟主の意見だけがすんなり通るわけではないだろうが

止めることができるのであれば盟主だけだ。

「可能性はありますよね。

でも、姫のほうは媚を売れるような性格じゃなさそうですよ。」

クレシスがふんつと鼻を鳴らす。

「自分の国が戦火に包まれるのを防ぐためならなんだってするだろうさ！」

それよりも心配なのが暗殺だ・・・特に姫のな。

戦争が終わることに不満を持っている連中が姫を暗殺したらパストはその仇討ちに出るだろう。

そして再び戦争勃発、というわけだ。」

「でも、護衛がついてますよ・・・腕のいい。」

自分がティンを難なく制圧したことを思い出したせいでこの言葉は虚しく響いた。

クレシスは自信のなさを感じ取ったのかすぐに言葉をついだ。

「ジェス、姫とその護衛と出会って言葉を交わしたお前ならば

2人に接近することができないではないか？

そして姫が盟主を説得するまで暗殺者からその身を守ることを提案できるだろう？」

「・・・出来る限りやってみます。」

しまった。こんなことになるならあんなことすんじゃなかった。

ジェスの後悔を尻目にクレシスは満足そうに頷いた。

「では適当な”出口”からすぐに人間世界に戻りパストに向かえ。」

「あの、クレシスさんはこれからどうなさるのですか？」

人間世界には戻らないのですか？」

もうすでにどこかに向かおうとしているクレシスに質問する。

背を向けていたクレシスは首だけをこちらに向けた。

「私は今ある悪魔を追っている。

その悪魔は今までの連中とは明らかに違う。

みずから”出口”を探し、人間世界に入ろうとしている。」

通常悪魔はみずから”出口”を探すことはない。偶然見つけた”出口”から出て行く。

「何が目的なのかは分からないが放って置くわけにもいかんからなそれに……。私は悪魔世界に長く居すぎた。もう人間世界の空気は私には

合わないだよ。

では、ジェス、頼んだぞ。」

そういうとクレシスは再び暗い悪魔たちの世界に戻っていった。その目は出会った時よりも赤く輝いていた。

ジェスは”出口”を探して歩きだした。

ここはシグル連合国のとある元老院議員の部屋。
豪華なイスに深く腰掛けている男は自分の判断は間違っていないと思っていた。

反対する者もいるが、どの道この類の汚いことは汚い連中に任せるのが一番。

しかも腕は絶対の保証つきだ。

「獲物は普段お前達が相手にしている悪魔ども比べたらはるかに楽に仕留められる。」

2人の暗殺者の態度はまったく違う。

「ふゝゝん、ま、金くれるんなら悪魔だろうが一般人だろうがスパツとやってやるけどな。」

「どうでもいい……早く標的を教えろ。」

「標的は神聖パルト王国の姫、シーデイスだ。」

「楽勝!!」

「簡単だ。」

そついうと2人はさっそく暗殺に向かった。

議員は口の端を吊り上げて笑った。

あの2人のハンターを手に入れたのは大成功だ。

狂ったハンターが神聖パスト王国の姫にせまる。

再会そして・・・

ここ3日間の間にシーデイスをねらった暗殺者が五人送りこまれた。そのいずれも翌朝にはただの肉の塊となったのだが・・・。

その暗殺者たちの（ありがたくない）訪問がここ最近ぱったりと止んでいた。

それはそれでいいのだが、ティンには不気味に思えた。

嵐の前の静けさ、という感じがどうもぬぐえなかったのでティンはシーデイスの部屋の中で寝ずの番をする許可をもらいそして今、こうして護衛をしているのだ。

親友、シーデイスのおだやかな寝顔。

彼女がこんなに安心できるのは夢の中だけになってしまった。

自分を狙う暗殺者、そしてあのくそつたれのハンターのジェスの不吉な死の予言。

それらのせいでシーデイスの精神はかなり傷つけられた。

月の光が窓からわずかに差す。

今日も何事も無く過ぎていくことを祈ろう。

ティンが窓を何気なく見たとき、ひょいっと何かが顔を出した。

ジェス？

一瞬そう思ったがすぐに違うと気づいた。それと同時に剣を抜く。

「こんばんわ、お嬢さん。」

全体的にこざっぱりと身なりでジェスとはまるで違う。
ただ、共通点もあった。

目が充血したかのように赤いのだ。

窓の外から満面の笑みでこんばんわ、などというヤツがまともだとは思えない。

ティンは剣を突き出した。

静寂をガラスの割れる音が破壊した。
剣は虚空を突いていた。

「な、何？どうしたの、ティン？」

「おっと、起きちゃいましたか。どうかお気になさらず。
あちらのお嬢さんの歓迎の方法が少し過激なだけですよ。」

男はいつのまにかシーデイスのそばに立ち、にこやかにシーデイスに微笑んだ。

だが、その笑顔も暗闇に光る赤い眼のせいで不気味だった。

「くそ！！」

ティンが男に斬りかかる。

男はふう、と息をつき、短剣を抜くとティンの剣を受け止めた。

びくともしない。岩に斬っているようだ。

ティンは一步距離を置き、頭、胴、正確でなおかつ鋭く斬る。

下手に力に対抗しても勝てないのはジェスとの一戦で分かった。

力で勝てないなら技、速さで勝負。それで今まで勝ってきたのだから。

さすがに短剣で全てを受けきることはできず男の身体から血が吹き出る。

ティンがシーディスと男の間に割って入り、剣を構える。

「へえ………」

男の顔から笑みが消え、流れ出る血を興味ふかそうに見る。
意味の無い笑顔も不気味だったが無表情はもつと不気味だ。

「衛兵！！敵だ！！敵襲だー！！！」

ティンが間髪を入れずに叫ぶ……が、何の反応も返ってこない。
どういうことだ？

「ああ、無駄無駄。今頃俺の仲間がさ……」
今頃、ダンスでも踊ってんじゃないの？ワン、ツー、ワン、ツー
ってね。」

いかにもジェスが言いそうな台詞だ。

だが、この冗談が意味することは……………。

「相棒が頑張ってるのに俺がさぼっちゃダメだよな。」

男が視線を上げティンを捕らえる。

「ヒナを殺すにはまず親鳥から。」

親鳥さん、Are you ready……………?」

言葉はふざけているが、口調と眼は冷淡そのものだ。

「シーデイス様、離れていて下さい。」

男が短剣を抜き、一気にティンとの距離を詰める。

突き出された短剣を弾くと、すぐに蹴り、それを半歩引いてかわすと拳……………息つく間がない!!

短剣を猛烈な速さで繰り出し、ティンが攻撃しても手や足の防具で防ぎ

そして足蹴りや拳で攻撃する。

しだいに壁際に追い詰められる。

なんとか反撃しようと攻撃したのが間違いだった。

袈裟斬りはあっさり防がれ、逆に腹に蹴りを喰らってしまった。

思わずひざをつく。

「あんたは一本、俺の武器は4本・・・手数が違うよな？」

薄笑いを浮かべた男の顔に剣を突き出したがあっさり止められた。そればかりか手の甲を斬られ、剣を手放してしまった。

男はティンの剣を蹴り飛ばし、彼女の首をわしづかみにしてその首に短剣を押し当てた。

「いいなあお前。元気があってさ。」

こんなに手ごたえがあつたのは悪魔と戦つて以来だ。」

「やはり・・・ハンター・・・か・・・!!」

「お！分かつたの？・・・俺が赤眼だからかな？」

まあいいや。

さあて!!こっからが楽しみだ!!

まずは手の指を一本一本落としていく。次に目玉をえぐりだす。

イモムシみたいに転がりまわる姿を想像するだけで・・・

ああ・・・お前はどんな悲鳴をあげるんだろうなあ・・・。」

ぞっとした。

男は恍惚状態になっている。これは脅しなんかじゃない。本気でやるつもりだ。

ティンは死力を振りしぼって男の指に噛み付いた。

なんとか男の手から逃れたがすぐに足蹴りをされ踏みつけられた。

「安心しろよ。時間がないから普通の半分で勘弁してやる。
まあ……」

男はそこでせせら笑った。

「悪魔でも耐え切れない痛みだけど、な。」

ティンの首にスーと傷をつけた。

その時男の肩越しに壺を振り上げたシーデイスが現われた。
そのまま壺を男の頭に振り落とす。

パアアン!!!

響き渡ったのは壺が割れる音ではない。

男はすばやく振り返り、シーデイスをはたいたのだ。

「ほんつとに元気いいな。」

お姫さん、あんたもあとでかわいがってやるからそこで待ってな。

「

シーデイスは地面に倒れ、動かない。

怒りが湧き上がる。

だが、踏みつける男の力は強く、押しのけることができない。

「力が無いってのは不幸だよな。」

男の短剣がティンの指の上に滑る。

斬りおとされる！！

そう思った瞬間、男の悪魔のような笑みが一瞬で引き、ティンの上から飛びのいた。

男の後を追うように何かがティンの上を飛び越えた。

「ジェス！！」

今度こそジェスだった。

そしてティンの意識はここで途切れた。

狂ったハンター

顔は怒りに燃え、大剣を握る手には血管が浮いている。

「てめえ……今何してた？」

男はなんの悪びれた様子もなく肩をすくめた。

「何って……”いいこと”しようとしてたんだよ。
分かるだろ？お前もハンターなら。」

「殺そうとしてたんだろうが……！
このハンターの面汚しが……！」

ジェスと最後に別れたときも怒り……ではないがそれに近い感情を

ティンは向けられた。

だが、今回は純粹な怒りだ。ジェスが本気で怒ってる。

「俺たちは悪魔しか殺さない……！
それがハンターの誇りで生き様だ……！」

男の顔に露骨な不快感が浮かぶ。

「考えが古イんだよ……！
お前だつてさあ、悪魔を殺すことに快感を感じるだろ？
俺の場合はそれが人にすり替わっただけの話だ。」

ジェスの堪忍袋の緒が切れた。

大剣を振りかざし、男に斬りかかった。

斬りおとされた大剣を短剣で受け止め、男が蹴る。

ジェスがそれをかわし、振り上げた大剣を今度は横に振る。

激しい斬りと打撃の応酬が続く。ジェスは重量のある大剣にもかかわらず

それを柳の枝を振るかのように斬っていく。

男は短剣と打撃技で攻撃する。

ハンター同士の戦いは熾烈を極め、両者に小さな傷ができたが致命傷でなければお互いにさけることはしなかった。

だが、やがて経験の差が、ジェスのほうが押され始めた。

大剣は当たれば致命傷になるが、当たらなければ意味が無い。

ジェスの剣撃は空を裂くばかりで、かすり傷をつけるのが関の山だった。

男の足がジェスの足をすくい、ジェスの体勢が揺らいだ。

男の短剣がジェスの肩を貫いた。

そしてその傷に蹴りを入れ、苦痛で歪むジェスの顔面を殴りつけた。

「つつ……。」

「はっ！しょせん新米ハンターなんてこんなもんだ！！」

まだ完全な赤眼にもなつてねえのに調子乗ってんじゃねえ！！」

男の眼はもはや完全な赤と言ってもよかった。

そして丁寧な口調も、無意味な笑いもどこかに吹き飛んだ。

男が短剣を振り上げる。

今まさにジェスに振り下ろされようとした時、ガラスを引っかくような音と

ともにジェスと男の間に白い線が走った。

「ちつ、こんな時に・・・!!」

白い線が両方にわずかに開き、その間を縫うように何かが這い出てきた。

作りそこなったゼリーののような形で全てが真っ黒だ。

みるからにぬるぬるしている”それ”は床にぼとつと無様に落ちると足も手もないのにずるずると男が入ってきた窓に向かった。

空中に出来た”出口”の中から赤い針が飛び、”それ”に刺さった。針は床にまで食い込んで、”それ”はくさびに打たれたようになり動けなくなった。

「やっと追い詰めたぞ!!ゼミラ!!」

”出口”をこじ開けて出てきたのはクレシスだ。

「クレシスさん!!」

「ジェス!!なぜ、ここに・・・?」

ジェスの叫びにクレシスが反応した。

男もクレシスという言葉には聞き覚えがあつたらしい。

「クレシス……だと……。」

そうつぶやいた。

その時、”それ”……クレシスがゼミラと呼んだ悪魔(?)が風船のようにふくらみはじめた。

ジエスにはその光景は見覚えがある。イモムシ悪魔と同じ……なのか？

「くそつ、ジエス!!その子を守れ!!」

言うが速いかクレシスは床で気絶しているシーデイスを覆いかぶさった。

ジエスはクレシスに言われたとおりシーデイスと同じく意識の無いティンに覆いかぶさった。

眼の端に男が逃げ出すのが見えた。

だが、どうすることもできない。

あたりが一瞬が暗くなり、そして………静寂。

ゼミラ

真っ暗だ……。あ、これは私が目を閉じてるせいかな。
でも、この胸の苦しさは一体……………？

ティンが目を開けた。

はっきり言おう。あれは事故だ。

悪魔の自爆から動けないティンを守るために身を挺してかばった。

”手を置く場所”に気をかける時間などなかった。

……………たとえそれが胸の上であつたとしても、仕方なかった。

しかしティンは怒った。

ハンターとの戦いで服があちこち破れ、その破れ目に俺の手が入り込み

(くどいようだが、わざとではない。どさくさにまぎれてそんなことはしない)

直に胸に手が触れていたからだ。

やつは守るためにかぶさっていた俺を蹴り上げ(どこを蹴ったかつて？

うむ……………男性諸君なら分かるだろう。俺の口からはいえないな。

これ以上この話の品を下げたくないのですね）
けたたましい悲鳴（雄たけび、と言い換えてもいい）をあげ、俺ほ
おを打った。

「この、変態！！！」

というありふれた台詞とともに。

クレシスが部屋の内に入ってきた。
表情は暗く（笑っているのも不気味だけどね）それを見れば城内が
どういう状態なのがよく分かった。

「半数以上が死んでる。

まあ、一撃で殺されたようだから痛みは感じなかっただろう。
それだけが救いだな。」

ハンターに刺された傷に包帯を巻いていくぶん痛みの引いた俺が
クレシスと向き合う。

「普通の人間じゃあこんなことは無理です。
やっぱりハンターでしょうか？」

「たぶん。」

ティンが横から口を挟む。

「あんとと戦ったやつが、相棒がなんとかかと言ってたわ。

「……あんだと同じでくだらない冗談が好きなやつがね。」

「おい！くだらない冗談ってなんだ。くだらないって！！
しかもあんなやつと一緒にすんな！！気分が悪い。」

実際思い出すだけで鳥肌が立つ。

「人間に手を掛けるようなハンターなんかくそつくらえ！！」

「ふん！同感だな。」

クレシスもティンからハンターがシーデイスの暗殺者であったことを聞いたとき

以来、かなり不機嫌になっている。

「私はその場にいれば八つ裂きにしてやったものを！！
ゼミラの自爆のどさくさに紛れて逃げおつて！！くそつ！！」

クレシスは吐き捨てるように言つて床に腰を下ろした。

「あの……ところであなたは、だれ……ですか？」

シーデイスがおずおずと言った。

まあ、それもしようがない。自分を殺しにきたやつと同じ赤い眼という

特徴を持っていて、そもそもそうじゃなくても血まみれで突然現われた

人物を不審に思つのは至極まっとうな感情だ。

「ハンター。」

ある悪魔を追っている途中でここに来てしまった。
安心しろ、ジェスと同じく”まとも”なハンターだ。」

”まとも”なハンター。悪魔しか殺さない。

”狂った”ハンター。人間、悪魔の見境なく殺す。

女性陣にこの判断はついただろうか？前に俺が説明してやったから大丈夫だろう。

「はあ・・・そうですか。」

うっっんやっぱり微妙かな。

一応敵じゃないってことは伝わっただろうからそれだけでもよし、
としよう。

「クレシスさん、さっきのあのゼリーみたいなやつ・・・ゼミラッ
てのが

ずっと追っていた悪魔ですか？」

「うむ。私の失態だ。やつのこの人間世界への侵入を許してしまった。
」

「でも、自爆しましたよ。」

部屋の中にはまだゼミラの肉片が落ちている。
ティンが部屋の隅の集めたのだ。

「やつはああして自爆してもしばらくすると別の場所で再生する。
一週間かそこらでな。

殺す方法が分からんやつかいな悪魔だ。

ゼミラをまた追わねばならんというのにこんどは狂ったハンター

が2人。

問題が多すぎるな。

ところで、ジェス、お前がここにいるということはここはパストか？」

「はい。あつちにいるのがパスト王国の姫、シーデイス。で、こつちがティン。なまいきなただの護衛です。」

ティンが俺の足を思いつきり踏みやがった。
くそっ！誰のおかげで命があつたと思つてんだ。

「あの話はもうしたのか？」

「あ、いえまだです。」

おい、これから大事な話がある。お前はいつまでもそんな目で俺をにらむな！

いいか？」

ここで俺は戦乱の拡大と通り道の数の増加は関連しているということこのままパスト王国とシグルが戦争を始めたら悪魔たちが人間世界に乗り込んでくること

そしてそれを阻止できるほどの数のハンターがいないこと……を話し

そして核心を続けた。

シーデイスがシグル連合の盟主を説得して戦争を回避することがこの人間世界を守る唯一の方法だということを話した。

しばしの沈黙……そして。

「つまり、私に今回の政略結婚を受け、敵の盟主を誘惑して戦争を回避させる、ということですか……」

清纯そうなシーデイスの口から”誘惑”という言葉が出たのは意外だが

そこまで分かっているなら話は早い。

「方法はどうでもいいが、そういうことだ。」

すつぱりとクレシスが言い放った。

「私が……つらい思いを我慢すれば多くの人が救える。」

「つらいつて……シグルの盟主はもしかしたらイケメンかも……」

「顔は存じませんが歳は私の3倍です。」

シーデイスは15、6だから48くらいになるな。おっさんじゃん。

「ああ……そうか。」

でも、うまくいったらハンターたちの間であなたの銅像を創って毎日崇めるよ。シーデイス様、ありがとうございます……ってね。

「またしても俺の口が災いを招いた。」

ただ今回はティンよりも早くシーデイスがぶちぎれた。

「ぶざけないで!!」

私にも……私にだって自分の好きな人と結ばれる権利があるはずよ!!

私は聖人君子じゃない……ただの人間よ。

自分だけを犠牲にするなんて……できないわ。」

そういつて泣き崩れた。

王族と盟主の結婚。

おそらく”関係”を持つことになるだろう。

少女にとっては（男の俺がどうこついう問題ではないが）かなり嫌に違いない。

夜はとつくに明けていた。

結婚まであと3日。

誘惑とワナ

そもそも今回の政略結婚は俺やクレシスさんが提案したものじゃない。

それなのに輿入れのため、シグル連合に向かう間もシーデイスは不機嫌なままだった。

まあ、気にしないことにしよう。

俺は俺で他人のことにかまってられないほど忙しかったのだから。

狂ったハンター襲撃から輿入れまでの3日の間、クレシスさんが俺に稽古をつけてくれたのだ。

キツイなんてもんじゃない。

ゲロ吐いて、血も吐いて、時に理不尽なことまで要求された。

そしてクレシスさんは輿入れの前にゼミラを探すためにどこかへ向かった。

一本のピンを俺にわたして。

「いいか、負けたことは気にするな。

お前の恥は敵の血をもってぬぐえ。

・・・これはいざ、というときになったら飲め。役に立つはずだ。

「

「なにぼくとしてんの？」

どうせ新しいくっだらな冗談でもかんがえてるんでしょ？」

ティンが前を向いたまま言った。

ったく、こいつは俺の頭を冗談製造工場かなにかと勘違いしてんじやないか？

それに俺がいうのは”くっだらない”じゃなくて

高尚で優雅で巧みで……………（……………部分には好きな誉め言葉を入れてくれ

俺の冗談のすごさはこの3語だけでは言い尽くせないからな）
そしてみごとに的を射てる。

「まだ、胸を触ったことにしてんのか？」

俺は全然気にしてないぞ。

あんなもん触っても嬉しくもなんともない。」

パアンと俺の頭が派手な音を立てる。

すたすたとティンが早足で俺から遠ざかった。

「”あんなもん”で悪かったわね！！」

捨て台詞まで吐いていきやつた。

「んなこと言っただろ……………」

忘れようたって……………う……………」

ジェスは雑念を振り払うかのように頭を振った。

敵国の王女に対する出迎えは表面上は好意的だった。

庶民の口には一生はいらぬ豪華な料理。華やかな曲芸、音楽。
（ちなみに俺はシーデイスの小姓として紛れ込んでいたのだが
この式典の会場には入れず、別の部屋で粥^{かゆ}みたいないな
味気ないものを食わされていた。）

その夜、シーデイスの部屋に呼ばれた。

中にはむすつとしたティンが、ただ一人座っていた。

「あれ、姫様は？」

「……………部屋。」

「この部屋？…………いねえけど。透明人間になっちった？
出てこーい。」

「シングル連合盟主ティールマンの部屋！！」

「…………ああ、”そーゆーこと”。

…………早すぎない？その…………ねえ？」

さすがに女性の前で堂々と言うわけにはいかず少しはぐらかした。

「姫様来てからまだ一日も経ってないじゃん。」

「呼ばれたのよ。

彼女、もう泣きもしなかったわ！

…………どうしてあげればいいか、全然分かんなかった。」

「まあ、仕方ないって。」

そういつてイエスはイスにもたれた。
ティンのにらみもまったく意に介せずに。

「戦争になったら、”出口”が開く。悪魔が人間界に来る。
人間全滅・・・はい、お仕舞い。」

10 救うなんて不可能だ。1 か2 は犠牲になる。」

「よく言えるわね、そんなこと！」

あんたが犠牲になる立場だったならそんなこと言えないくせに！」

「まあね。俺は犠牲になる立場になったことないから。」

怒りを通り越して憎悪の感情がティンの顔に浮かんだが
それは彼女がうつむいたせいで見えなくなった。
イエスもそれ以上軽口をたたく気になれず、黙った。

「あんたは・・・ハンターとしてじゃなくて
あんた個人としてはどうなの？ 今回のこと。」

沈黙をティンが破る。

うつむいた顔をあげ、視線をイエスに向けている。

「・・・馬鹿馬鹿しいね。」

政治なんて別に興味も関心もないけど・・・
人の気持ちを無視するようなやり方は虫酸が走る。
だからってお前の味方する気はない。

おれは公私ははっきり分けるタイプだかね。」

ハンターとしてじゃなく”ジェス”という人間の意見を初めて聞いた気がした。

ティンは真剣に聞き入っていたが最後の最後にふざけた口調が滑り込んだので

興ざめした。・・・しかし、それでも・・・ジェス個人の人となりは意外とマトモなのかもしれない。そう思った。

「姫様のどこにいくか？」

「え？」

「・・・いやよ。そんな・・・覗くつもりなの？」

「口も悪い、スケベなんて最低よ。取り得がないやつね。」

「ばーか。そんなんじゃねえよ。」

「護衛だ、護衛。」やってる”最中に襲われたら誰が守るんだよ。」

「部屋からちよつと離れた場所で待機してて・・・姫様が悲鳴の1つでもあげれば突入。うまくいけば姫様の貞操が守れるかも。」

「・・・やっぱあんた最低だわ。」

パスト王国の姫、シーデイスの護衛だ。

この言葉1つで盟主ティールマンの部屋まで衛兵に案内された。ただ、部屋まであと100メートルというところで止められた。

「では、私はここで。」

「・・・これ以上先には進まぬようお願いいたします。」

そういつて衛兵は引き下がった。

「あのやろつ。俺のことちらちら見てやがったぞ。礼儀を知らんやつぢやな。」

「あんたが小姓の格好のままだからよ。」

「……ところでこのぴりぴりした感じ、なんなのかしら。」

「テイルマンってやつが発するエロオーラかも。」

「次、下品なこと言ったら刺すわよ。」

「へいへい。ん〜と、これは……結界だな。」

「ま、俺にとつちや何の障害にもなんない程度の強さだけだな。」

「破れるの?」

「楽勝。対人用の結界だから”純粹な”人間じゃないハンターには効き目が薄いんだよ。」

「ハンターには魔法は効きにくいってことね。つてことは悪魔にも?」

「ん〜……たぶん、そうかな。」

「ハンターで戦闘用魔法を使う人なんてめったにいないからよく分かんねえ。」

「あ、でもクレシスさんのブライドは……でもあれは……ん〜」

「ジェス!!」

「なんだよ！人が考えてる時に！」

「あんたの脳みそじゃ何年かかったってロクなこと思い浮かばないわよ！」

それより、あれ！」

ティンの指さす方向に目をやると2人の人影がティールマンの寝室の前に
たっている。

「どうやってあつこまでいったんだ？」

俺たちに気づかれずに行くのはimpossibleだろ。」

寝室までは一本道になっており、通せんぼするように立っていた2
人に

気づかれずに通るのは確かに不可能だった。

「取り押さえるわよ。」

剣を抜いてティンが言った。

ジェスも同じく剣を抜く。室内なので大剣は使えず、代わりに
少し短めの剣を使うことにした。

謎の2人はドアの前でごそごそやっている。

もし後ろを向けば獲物を狙う猫のごとく近寄る2人に気づいただろ
うに……。

「おい！」

ジェスの声でばつと謎の2人は振り返ったが、時すでに遅し。ティンの剣がのど元に、ジェスの剣も別の男に押し当てられた。

「まぬけなやつだな。俺たちが見えなかったのか？」

ジェスがいやらしく笑う。組み伏せられた男は困惑しきっている。

「な！どういうことだ、なぜ、見える！？

”目くらまし”はしっかりかかっていたのに・・・！！」

「あ、魔法使ってたんだ？でも残念！！”俺”には効かねえよ・・・あれ？じゃあなんでお前は見えただ？」

ジェスがティンを見ると、彼女は目を見開き、取り押さえた男を見ていた。

「ジェスター・・・様？」

「きみは、シーデイス王女の護衛の・・・ティン・・・だったかな？

放してくれ。僕たちはきみらが考えているようなことをしにきたわけじゃないんだ。」

「しかし・・・それは・・・。」

「なんだよ、こいつら？」

「こいつは・・・この方はシグル連合の盟主ティールマン様のご子息ジェスター様だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4818p/>

悪魔と剣士と

2010年12月13日23時10分発行